別紙様式３（第３条関係）

論　文　要　旨

氏　名　大坪　志子

論文題目（外国語の場合は、和訳を併記すること。）

先史時代の石製装身具の研究

論文要旨（別様に記載すること）

（注）１．論文要旨は、A4 版とする。

２．和文の場合は、４０００字から８０００字程度、外国語の場合は、２０００語から４０００語程度とする。

３．「論文要旨」は、フロッピーディスク（１枚）を併せて提出すること。
（氏名及びソフト名を記入したラベルを張付すること。）

先史時代の石製装身具の研究

要　旨

本論は、先史時代に使用された石製装身具について、その石材を理化学的に分析することで材質にかんする正確な情報を得、これにもとづいて石製装身具の成立・展開・終焉を明らかにしたものである。対象にした時代は縄文時代、地域は九州を中心とする東・西日本、朝鮮半島である。

先史時代とは、「文献によってその様相が知られる歴史時代に先立つ時代」（角田文衛 1979「先史時代」『世界考古学事典』p.621）であり、我が国では旧石器時代・縄文時代・弥生時代が該当する。石製装身具が盛行するのはこのうちの縄文時代と弥生時代であるが、本論ではその成立に重点をおいたため、縄文時代後半を研究対象とした。装身具とは「広義の衣装に含まれるが、一般に身体にまとう衣服以外のものをさす」（鍵谷明子 1987「装身具」『文化人類学事典』p.428）。考古学では墓で人間が着装していた事実や着装用に工夫された形状からこれを認識している。その素材には石・貝殻・骨・植物質があるものの、有機物は地中の保存条件によってその残存率が大きく左右される。一方石製のものはそうしたことがほとんどない。また石製装身具は琉球列島をのぞく日本列島に普遍的に存在し、縄文時代の装身具を代表するものといえる。本論で石製品を装身具研究の対象としたのはこうした理由による。

石製装身具の研究の現状と問題点をのべる。九州縄文時代後晩期の石製装身具は、石器や他の時代の石製装身具に比べて、編年や材質の特定など基礎的な研究が遅れている。編年研究については、石製装身具が遺構から出土することが稀で、共伴する遺物の特定が困難なことが大きな要因であり、その結果与えられる年代は縄文時代後晩期という漠然としたものになっている。そのため数種類見られる玉類が、縄文時代後晩期を通して併存するかのような捉え方をされている。材質の特定については、色調のみから、ヒスイ・蛇紋岩・緑色片岩等と報告され、特にヒスイとする報告例が多い。縄文時代におけるヒスイは糸魚川産のものがもっぱら使用されていることが鉱物学的分析からわかっており、このため、当該期には東日本からヒスイ製品が盛んにもたらされたという印象が持たれることとなった。こうした印象的理解から九州縄文時代後晩期の石製装身具は東日本の影響下で成立したものという解釈が促進されたが、また、各地で様々な石材を利用して石製装身具を製作していたという事実もその一方であり、この二つの関係があやふやなままの状況が続いている。そのため、流通などの点に踏み込んだ研究はなされてこなかった。こうした現状を打破するには、何より時期的位置付けの確定と、石材の正確な把握が不可欠である。

第１章では、石製装身具に使用される石材を同定し、石製装身具に使用された石材の種類や比率を正確にとらえることを試みた。鹿児島県上加世田遺跡から出土した緑色の玉類は、ヒスイ製と報告されていたが、藁科哲男氏による蛍光Ｘ線分析の結果ヒスイ製ではな

いことが判明し、その石材は藁科によって「結晶片岩様緑色岩」と仮称された。九州では、他に数遺跡でこの「結晶片岩様緑色岩」が確認されているため、筆者はこの石材が縄文時代後晩期の石製装身具に広く使用されている可能性が高いのではないかと考えた。この石材が何であるかを正確に同定できれば、石材の原産地や流通研究の手掛かりとなるため、後晩期の石製装身具を中心に石材同定を主目的とする悉皆調査を行った。破壊可能な試料を準備し、３種類の理化学的分析方法を用いてこれらの石材分析を行った結果、藁科氏の仮称した「結晶片岩様緑色岩」は「クロム白雲母」であることを突き止めた。さらに、縄文後晩期の遺跡で出土した 814 個の石製装身具を対象とした同定作業の結果、石製装身具の約 70%がこのクロム白雲母製であることも判明した。またクロム白雲母を包含するとみられる地質学的な情報と考古学的な考察から、原産地は藁科氏が唱える南九州にある可能性は低く、熊本県の南部にある可能性が高いことを述べた。

第２章では、縄文時代全般の変遷における後晩期の石製装身具の特色を抽出し、石材との関係も含めて検討し、玉類の編年を試みた。時間的位置付けについては、玉類の変化を勘案して、縄文時代早期後から晩期までを以下のように５期に分けた。

Ⅰ期：縄文時代早期後半～前期

Ⅱ期：縄文中期～後期中葉

Ⅲ期：縄文時代後期後葉

Ⅳ期：縄文時代後期末葉～縄文時代晩期

Ⅴ期：弥生時代早期

この区分に沿って石製装身具の変遷と特徴を抽出すると、玉類の使用方法と石材において共通した変化の画期を捉えることができた。すなわち、Ⅰ期～Ⅱ期の石製装身具が大型で単独使用に適しているのに対し、Ⅲ期になると急に小型化し幾つも連ねて使用するタイプの玉へと変化している。またⅠ期～Ⅱ期は、玉髄や石英など美しい石のほか砂岩や頁岩など一般の石材もまた多用されており、特定の石材への固執は看取されないのに対し、Ⅲ期には突如としてクロム白雲母が圧倒的多数を占め、その他に滑石がみられる程度で、石材はほぼこの２種類に限定されてしまう。つまりⅢ期とⅣ期の間に変化の画期を認めることができる。また、Ⅳ期の終わりからⅤ期にかけては、この時期日本国内で利用されていない碧玉やアマゾナイト製品がクロム白雲母製品に取って替わり、外来の玉類が登場し主流となる画期が認められる。

次に、Ⅲ期・Ⅳ期の玉類を以下のように分類し、出土状況から年代を判定して玉ごとの盛衰を検討した。

丸玉Ⅰ・丸玉Ⅱ

獣形勾玉

三万田型垂飾

勾玉（A～E 類に５細分）

管玉（A～C 類に３細分）

小玉

その結果、Ⅲ期には玉類の全種類が見られるが、その中でも丸玉Ⅰ・Ⅱ、獣形勾玉、三万田型垂飾、管玉 B が盛行し、Ⅳ期になると衰退してほとんど見られなくなる傾向が把握できた。Ⅲ期には勾玉・管玉 A・小玉もあるものの数は少なく、Ⅳ期になると急激に増加することが判明した。つまり、Ⅲ期には丸玉Ⅰ・Ⅱ、獣形勾玉、三万田型垂飾、管玉 B が主流をなす玉類であり、Ⅳ期になると勾玉・管玉 A・小玉が主流となるのである。この二つのグループの玉類について石材からも、その属性の違いを指摘できる。丸玉Ⅰ・Ⅱ、獣形勾玉、三万田型垂飾、管玉 B のうち、三万田型垂飾と丸玉Ⅱ以外は、石材にヒスイが用いられており、これらはヒスイ産地を擁する北陸で製作された東日本の玉文化の玉である。丸玉Ⅱは滑石製であるため九州で製作されたと考えられるが、丸玉Ⅰを摸倣した形態であるため東日本の玉に含める。勾玉・管玉 A・小玉はクロム白雲母製であり、九州で製作された玉である。管玉 A は管玉 B をより細く小さくした形態をしており、小玉は丸玉Ⅰ・Ⅱをさらに小さく、薄くした形態である。勾玉は、Ⅲ期に尾が跳ねあがった稚拙な形態から始まり、Ⅳ期には九州特有の形態へ定形化する。つまり、Ⅲ期には東日本の玉類が盛行し、Ⅳ期には九州で独自に形態を変えた九州型の玉類が盛行するのである。各期ごとの変遷を追うと次の通り整理できる。Ⅲ期は、東日本の玉文化が九州へもたらされ、九州の人々は東日本の玉文化の影響をうけて丸玉Ⅰを摸倣して丸玉Ⅱの製作を行うようになった時期である。丸玉Ⅰの流入は、小さな玉を数多く連ねて飾りを作るという、装着法上の新しい要素ももたらした。その一方でクロム白雲母という美しく加工が容易な石材に恵まれたことにより、九州の人々は東日本の玉類をヒントにしてより小さくスマートな管玉 A や小玉の製作を始め、また勾玉も生み出した。Ⅳ期は九州人々が作り出した九州型玉類が盛行し、各地に拡散する時期である。Ⅳ期の終わりからⅤ期には、円筒形をした管玉 C が出現し多数を占めるようになる。管玉 C はこの時期日本国内では製作されていない碧玉製である。また、やはり日本国内にはないアマゾナイト製勾玉も見られるようになり、この時期は、九州型玉類が終焉を迎え、外来の新しい玉に交代する時期である。

第３章では、クロム白雲母製と判明している資料を対象に、玉の製作と流通について考察を行った。Ⅲ期の始めには、大分県周防灘沿岸部・熊本平野・宮崎平野に出土例が集中する。クロム白雲母原石をもつ遺跡と玉類の分布状況からみると、熊本平野、周防灘沿岸地域、宮崎平野に石製装身具を集中的に生産する集落があり、そこから周囲の遺跡へと石製玉類がもたらされていたことが推測できる。これをパターン A とする。Ⅳ期になると鹿児島県の有明海沿岸部に玉類の生産遺跡が新たに登場する一方で、周防灘沿岸部では玉類の製作遺跡が消え、かわって熊本平野から別府湾へ通じるルート沿いの内陸部に遺跡が出現する。遺跡・遺物の分布からみると、熊本平野から大分県域は一つの流通ルート・分配圏となり、遠隔地へ製品が流通するための中継遺跡も存在したと解釈される。それはこれ

らの遺跡でクロム白雲母原石ではなく、玉類の未製品が出土するためである。中継遺跡は、石製玉類の最終的な加工を行いより遠隔地へ製品をもたらす役目をはたしていたと考えられる。これを流通のパターン B とする。Ⅲ期から存続する鹿児島県の大隅半島側でも同様の流通パターン B が見られるようになる。一方、Ⅳ期に福岡県南部と鹿児島県西部で新たに出現した大規模な玉生産遺跡周辺では、Ⅲ期と同様に生産遺跡から消費遺跡へ製品が直接流通するパターン A である。このようにⅣ期には流通パターンが A と B の二つが存在することが判明した。いずれの時期、流通パターンの場合もクロム白雲母の原石採取および分配は熊本平野の遺跡が行ったようであるが、いずれの玉製作遺跡へも十分な原石が供給されていた様子が見え、各地への石材の分配は必ずしも厳しい統制下にあったとは考えられない。このクロム白雲母製の玉は、広く流布することに意味があったと考えられる。ただし、周防灘沿岸の遺跡群がⅣ期には玉製作の様子は見られなくなり、大分のクロム白雲母を出土する遺跡は、一大製作地域である熊本平野を起点とする流通圏に取り込まれる。周防灘沿岸は東日本への玄関口として最も適した立地にあったことを考えると、この現象は九州型玉類の東日本への流通を契機としたものと推測される。

第 4 章では、本州の玉を対象として行った蛍光 X 線分析による石材の同定作業の結果を提示した。その結果、北陸地方及び東海地方において、クロム白雲母製玉類を確認することができた。これらは九州のクロム白雲母製品と同様の形態を呈しており、蛍光 X 線分析の結果、石材からも九州で製作された玉類と確認されたのである。また、クロム白雲母製品とヒスイ製品の孔の穿孔法と形態を比較検討した結果、穿孔方向や穿孔された孔の形態の組合せから、緑色の石材の場合はヒスイかクロム白雲母かが判別できることが明らかになった。両側から細くまっすぐ、断面形が長方形に孔があけられている場合はクロム白雲母製であり、片側或いは両側から、V 字に開く孔があけられている場合はヒスイ製品である。縄文時代後晩期は、一方的に東日本の玉が西へもたらされたと考えられていたが、逆に九州の玉が東日本へもたらされてもおり、双方向の玉文化の動きがあることが明らかになった。藁科哲男氏が既に確認していたが、新たな資料が判明したことで予想以上に九州型玉類が本州へ動いていることが伺われ、今後調査を進めればさらに類例は増加するものと推測される。東日本の九州型玉類と同じ形態の玉は、九州で作られた玉である可能性が非常に高く、石材を考慮せず形態のみの比較から東西の玉類の前後関係を検討することは、非常に危ういといえよう。

第 5 章では、朝鮮半島における勾玉が、九州の弥生時代の定型勾玉の成立に対する関係の有無を検討するために、勾玉の変遷を中心に朝鮮半島の石製装身具の出現と展開、各種類の祖形や前後関係について考察を行った。朝鮮半島新石器時代末は、九州縄文時代の後期後葉に、朝鮮半島青銅器時代は縄文時代の晩期から弥生時代中期中葉に、朝鮮半島初期鉄器時代は弥生時代中頃から後期に時期的併行関係が求められる。勾玉を形態により獣形勾玉・原始形勾玉・半円形勾玉・半環形勾玉・半玦形勾玉・定形勾玉・丁子頭勾玉・不定

形勾玉に分類して動向を検討した。動向を整理すると以下のようになる。朝鮮半島北部で新石器時代末に原始的な垂飾がみられたが発達しなかった。青銅器時代になり、勾玉の分布範囲は次第に南下し、勾玉にもいくつかの種類が見られるようになった。この中で半玦形勾玉は、朝鮮半島において最も精美な形態を持ち、青銅器時代の玉文化を代表する勾玉である。これと九州弥生時代の定型勾玉との関係に注目した。半玦形勾玉は、朝鮮半島において、勾玉の南遷が南部に到達した後に、半島中部の忠清南道に突如出現した。これは、中国東北部からの青銅器文化の伝播を背景に、朝鮮半島の中西部で発展したと考えられる。しかし、この勾玉は朝鮮半島において広く展開することはなく、また初期鉄器時代に継続もしない。そこで、地理的に九州に近い半島南島部の慶尚南道地域の勾玉を見てみると、この地域は勾玉が発達した地域であるが、半玦形勾玉ではなく原始形勾玉が発達した地域である。また、青銅器時代末から原三国時代の定型勾玉・丁子頭勾玉の出現までには、時間的空白が生じていることもわかった。この空白期間は、日本における縄文時代の石製装身具が終焉を迎え、弥生時代定形勾玉が誕生するまでの期間に相当する。以上から、九州弥生時代の定型勾玉の成立には影響があるとは明確に言えないことが分かった。

第６章は、九州縄文時代後晩期と朝鮮半島青無文土器時代の並行関係について、最近急速に進展・増加した炭素年代測定値を利用して見直しを行い、朝鮮半島における石製装身具と九州縄文時代後晩期の石製装身具の関係について考察した。まず、日韓における時期区分と絶対年代を整理し、両地域の玉の盛衰を検討した。九州縄文時代後晩期の玉の量と、朝鮮半島の無文土器時代の事例数を単位年で平準化し、土器型式がもつ時期幅の差の問題を解消し、九州縄文時代後晩期の玉類盛行期と、朝鮮半島無文土器時代の玉類の盛行期を比較してみた。すると、両者の盛行期は一致せず、九州の石製装身具の方が先に盛行を迎えることが判明した。次に、朝鮮半島における農耕の発展・拡散と栽培穀物の種類の動向と、九州での農耕の動向を、植物資料から検討した。近年、水洗選別（ウォーターフローテーション）による植物遺存体の資料が増加したが、年代測定の結果、コンタミネーション（混入による汚染）と判明し年代の見直しをせまられる事例が相次いだ。土器に残された植物の圧痕に印象材を流して型を取るレプリカ法による植物資料も、レプリカそのものの同定と、土器の時期判定の精度が問題となっている。その結果、正確な植物資料から九州において雑穀の栽培が確実であると判断できるのは縄文時代晩期末（Ⅳ-5 期）であり、明らかな農耕の流入と影響はこの次のⅤ期からであると考えられる。後晩期の小型化した石製装身具が出現し始めるⅢ期は、ダイズなどのマメ類が東日本から漸次伝わってきた時期である。

筆者はかつて農耕文化の一要素として朝鮮半島の石製装身具が九州へもたらされたと考えたが、前後関係や農耕の様子からこの考えは成立しないことが明確となった。九州の縄文時代後晩期の石製装身具はむしろ東日本との関連が強いと考えられる。

以上の考察から、九州縄文時代後晩期の石製装身具の成立と意味について、次のような

結論を導いた。Ⅰ・Ⅱ期の縄文時代早期後葉から後期中葉において、石製装身具には玦状耳飾や大珠、大珠状垂飾、大型管玉状垂飾、大型丸玉状垂飾、大型小玉状垂飾などが使用されていた。これらの石材は、砂岩や泥岩、玉髄、滑石など多様で、色彩も黒色・褐色・緑色・オレンジ色など多彩であった。これらは単独で垂下して使用されたと考えられる。Ⅲ期の縄文時代後期後葉になると、東日本からこれまでの石製装身具より小型化したヒスイ製玉類が流入し、九州の人々はこれらの玉類を一方で摸倣し、またより小型化・簡素化して、独自の複数を「繋ぐ装身具」を創出した。このとき、加工がしやすく、鮮やかな緑色のクロム白雲母の使用が始まった。やがて石材はクロム白雲母に統一され、色彩も緑色に統一されるようになる。石製装身具は複数使用、小型化と石材・色彩の統一という、使用方法と形状における変化の画期を迎えた。第６章で検討したように、九州の縄文時代後晩期の石製装身具が盛行する時期と朝鮮半島における玉類が盛行する時期が一致せず、Ⅲ期の九州縄文時代後期後葉に始まる石製装身具は、朝鮮半島青銅器時代の玉文化に影響を受けたのではなく、東日本の玉文化の流入によりその影響を受けたと考えられる。Ⅳ期の縄文時代後期末葉には、Ⅲ期に盛行した東日本系の玉類が衰退し、九州系の玉類が盛行するようになる。Ⅲ期に東日本の玉類が九州に流入したとき、東日本の祭祀（土偶）や栽培農耕（マメ類）などの文化要素ももたらされていた。このとき、九州の玉生産を行う主要な集落は、人工増加によるピークを迎えていた。その原因は、東日本から伝わった栽培農耕の開始による生業の変化と考えられる。Ⅲ期の終わりからⅣ期の初めにかけて、ピーク後の集落は分散し、周囲に新しい集落が誕生した。玉の生産を行う遺跡も、この動きと同様に近くへ移動している。このような集落の分散と形成という社会の再編がおこると、人々は精神的な繋がりを強化・維持するための方法を模索したと推察される。甲元が縄文時代後晩期の管玉装着について、農耕民に接触した縄文人が他と自己の識別をする手段として装身具の装着を始めた可能性を指摘していることを参考にすると、文化変化を受けた縄文人たちが精神的統一のシンボルとして、自らが作り出した九州型の石製装身具を持つようになったと考えられる。Ⅳ期における九州系玉類の展開は、このような文化変化を背景に起こった現象と考えられる。九州における縄文時代の玉類は墓から出土することが稀である一方、弥生時代の玉類は墓から出土するため、前者は「生者の玉」後者は「死者の玉」とされる。しかし、縄文時代の玉類が弥生時代になり墓に持ち込まれた例は管見では２例のみであり、玉類が死者へ副葬される習俗が定着する前に、既に縄文時代の玉類は使用されなくなっていた。これは、縄文時代の玉は集落の構成員が共有することにこそ意味があったからではないかと筆者は考える。その意味とは、上述した精神的な統一のためであり、それは平和で安定した社会の象徴だったと考えられる。後晩期の玉の絶対量が卓越して多いことからも肯首できよう。縄文時代晩期末になると、本格的な農耕が朝鮮半島から伝わり、支石墓の登場や半島系文物の流入など、直接的な渡来人の存在が伺われるようになる。また、寒冷化という気候の悪化も始まる。こうした生活や環境のあらゆる変化や影響に直

面し、九州の人々は自らが作り出した玉を、もはや社会安定のための効力を失ったものとして、廃棄してしまうのであろう。

九州における縄文時代後晩期の石製装身具は、東日本の玉類の流入により開始された。しかし、九州の人々は一方的に東日本の玉文化を受容したのではなく、その中から九州独自の石製装身具を創出した。それを可能としたのはクロム白雲母という石材の発見・利用である。縄文時代後期末葉に盛行を迎えた九州系玉類は、九州の人々の精神的統一と平和のシンボルとしての役割を担ったと考えられる。生業の変化による集落の拡大と分散・再編、及び気候の悪化という、文化変化と環境変化を背景として、九州系玉類は登場し、また衰退したと考えられるのである。